

だいちゃんのだいぼうけんシリーズの4
～シベリア編～



～西風 そら～

この作品の著作権は、西風そらにあります

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

だいちゃん、風すっか、柿ただちゃんの三人は、アムール河を後にして、今、シベリア大陸にさしかかっていた。

アムールただちゃんに地図とお弁当を買ったので、安心安心。何てたって『指し差し笹舟』!! これが凄いな。これは行くべき方向が分からなくなった時、一番行ったら良い方向を教えてください。

柿ただちゃんは、わくわくしながら、早速小さな川の上に浮かべてみた。しかし笹舟はぐるぐる回るだけで、ちっとも一か所を指してくれない。

「なんだあゝ、いんちき〜」
「行くべき方向がはっきりにしている時にしか指してくれないじゃないかなあ」

風すっかがつつん突きながら言った。

「うん、そうだね、今は旅が始まったばかり。どっちに行っても良いから、指す方向がないんだよ」

だいちゃんは笹舟を大事に懐にしまった。

風すっかが高く飛んでみたけれど、この平野の端は見えなかった。そこで三人は、平野の切れ目を目指して歩いてみる事に

した。

三人は楽しくお喋りしたり、なぞなぞを出したりしりとりしたり、唄ったりしながら、荒野を歩いて行った。

だいちゃんはそのす、柿ただちゃんはびよこびよこ、風すっかはてしてし。

風すっかは飛んでもいいんだけど、みんなより先が見えるのが嫌で、一緒に歩いたよ。

太陽が山とくっ付いた頃、大きな岩があったので、今日はここまでにしよう、とだいちゃんが言った。

柿ただちゃんはひっくり返って足に溜まった体液を循環させて、それから肩に掛けていた風呂敷包みを開いて、ご飯の準備を始めた。だいちゃんはズタ袋から帆布を出して、ちゃっちゃと天幕を作った。

風すっかが見回りがてら薪を集め、帰った頃にはだいちゃんが火を起こして、柿ただちゃんはパンにジャムを塗っていた。

アムールただちゃんのくれたパンは美味しくて、三人はお腹一杯食べてそれぞれにくつろいだ。

風すっかは見違えるほどお茶を入れるのが上手になり、これなら次のお山の祭りに喫茶店が開けるよ、と、柿ただちゃんに



太鼓判を買った。まあ、柿ただちゃんの太鼓判だから、あてにはならいけれどね。

だいちゃんは一入旅をしていた頃、真っ暗な中、一人で焚火の焰を眺めるのが好きだったけれど、今は、柿ただちゃんと風すっかのお喋りを聞きながら過ごすのも、かなり好きになってきた。

そうして三人、毛布にくるまって、風すっかの唱える不思議なお祈りを二人が復唱して、ぐっすりこんと眠りに落ちるのだった。

きつと明日も明後日もこんな感じで、そんなには代わり映えはしないだろう。それなのに何で明日がこんなに楽しみなんだろう。

平野を歩き始めて何日が経った頃、今まで平らだった地面が、なだらかな起伏を持ち出した。

違う土地に切り替わるサインだよ、と風すっかが言った。次はどんな景色かしら、と柿ただちゃん。

「見て来ようか？」

「ダメよお、あの丘の向こうがどうなっているか、わくわくしながら歩くのが楽しいんじゃないの？」

「うん、ボクもそうなんだ。だからなるべく飛ばないようにしているの」

そういえば、ここ何日か風すっかは、野営地の偵察以外は風袋の口を縛ったまんまだ。

「何だか風すっかじゃないみたいだね」と、柿ただちゃん。

「えー？ ボクが飛ぶしか能がないってコト？」

「そうじゃなくて、風すっかかって、飛ぶから風すっかでしょ。

飛ばないなら別の名前でもいいじゃない？ たとえば……」

「やだ！ やだ！ 変な名前付けないでよー」

風すっかはいちゃんの後ろに隠れて、助けを求めるように顔を見上げた。香気に二人の会話を楽しんでいたはいちゃんは、困って適当に相槌を打った。

「あー…、だけれど、『小さい風すっか』ってのもおかしいね。

僕から見れば、君は立派な一人前に見えるけれど」

「だめだめ、『小さい風すっか』は、風すっか族の中のボクの身分みたいなものなんだから。一族に一人前と認められて、初めて別の名前になれるんだ。兄ちゃんは、夏には新しい名前が貰えるんだよ」

「へえ！ どんな名前？」

「どこかの地名だよ」

「あ、『佐渡の風すっか』とか？」

「だいちゃんは風すっかの館にいた時、そう呼ばれた風すっかがいたのを思い出した。」

「佐渡は厳しい土地だから、相当の修練がいるの。兄ちゃんは多分、内陸の穏やかな所…、十日町あたりかな？」

「『十日町の風すっか』？ 何だか地味ねえ…」

「どこの風だって大事だよ」

そんな事を喋りながら大きな台地を登りきると、風の匂いが変わった。

三人が丘の上から見下ろした景色は、ゆったりとした大きな湖。湖畔にはこんもりと黄緑の灌木が繁っている。ずっと無彩色の荒野を歩いて来た三人には、嬉しい色だった。

湖の向こうには大きな森があり、そのまた向こうに横長に連なる山脈が青くけぶっている。

「わあ！ きれい！ ああ湖のほとりにお花が咲いていそうだねー」

柿ただちゃんは嬉しそうに背伸びした。

「平野の端っこに来たねえ、今日はちょっとしたお祝いだ。野

営にナイスな場所を探して来るよ」

風すっかは風袋の口をほどいてぴゅんと吹かし、湖に向かって滑るように飛んで行った。

「だいちゃんが柿ただちゃんの足を持って逆さまにして、足に溜まった体液を戻してあげている間に、風すっかはもう湖の上に到達していた。」

「おーい！ 水がめっちゃ澄んでる！ 青くて深くて、吸い込まれそうにきれい！」

それは一瞬の出来事だった。青く綺麗な水が、水面から蛇のように立ち昇ったかと思う間もなく、風すっかを巻き込んだ。

「か、風すっかー!!」

大きな波紋だけ残して再び静まり返った湖に向かって、だいちゃんは転がるように駆け下りた。柿ただちゃんは転がりながら駆け下りた。

灌木の繁みに飛び込んだ所で、横から誰かに引っ張られた。

「近付いちゃダメなんでシュ!!」

止まっただいちゃんに柿ただちゃんが激突した。

「人喰い湖なんでシュ」

だいちゃんの手にぶら下がるように掴まっているのは、見た事もない子だった。黄緑の毛がふさふさの、手の長いコアラみたいな子。身体の大きさはだいちゃんと柿ただちゃんの間くらい。

その子が大きな目を見開いて、必死でだいちゃんを止めようとしている。

だいちゃんは短い時間の中、迷った。だって、風すっかは今にも溺れてしまいかもしれないのに！

「アナタ達が行っても喰われるだけ！ あのとヒトを取り戻したいんなら、話を聞いてー！」

迷うだいちゃんの懐で何かが動いた。指し差し笹舟だ。懐から掴み出した笹舟は、ぐるりと正確に、その黄緑の子を指した。

だいちゃんは決心して、黄緑の子に向き直った。

「教えて、風すっかを助けるにはどうすれば良いの？」

「風すっかが溺れちゃうー!!」

柿ただちゃんが、赤い顔を青くしてあわあわしている。

「大丈夫！ 溺れないでシユ」

黄緑の子が、慌てて早口で言った。

「湖は掴まえた者をアブクの檻に包むの。アブクの中に眠らせて生け捕りにしておくれ」

「何でそんな事知ってんのよお?!、あんたも仲間なの？」

柿ただちゃんは我を忘れている。

「ボクも捕まったコトあるでシユ」

「そうか、分かった！」

だいちゃんが手をボンと打った。

「なによ！ なにが？」

「風すっかが水に入れた理由だよ。風の精は水に入れない筈なんだ、水と風は反発する物だから。アブクで包むってのなら納得だ、その子はきつと嘘は言っていないよ」

柿ただちゃんは、ちょっと冷静になった。よく見ると、灌木の間から黄緑の子が沢山こちらを見ている。

彼らはボワボワという生き物で、ここに湖が『やって来る』すつと前から、この灌木の繁みに住んでいるらしい。ふさふさの毛が首の周りを覆っていて、足が短くて、手の肘から下が凄く長い。

だいちゃんにぶら下がった子はポーポという名前で、落ち着いた二人に湖の事を話してくれた。

「ある日小さな水たまりが出来たの」

最初は小さな水たまりが虫などを引き込むのを不思議に思うくらいだった。それがどんどん大きくなり、鳥や動物が引き込まれるようになった。

「でもね、何故だか、一人捕まえるとその種類の動物はもう捕まえないの。ポワポワも一人捕まるともう襲われなくなったでシユ」

「へえ？ 何でだろ？」

「分らないでシユ…、湖の底には捕まった生き物のアブクが一杯沈んでいて、見た事もない生き物もいるの」

「人間がやる昆虫採集みたいね」

柿ただちゃんの言葉に、だいちゃんはぞくぞくとした。

「君は捕まった事があるって言っていたけれど、どうやって逃れたの？」

「仲間に助けて貰ったの…、ていうか、ポク達、順番に、わざと捕まっているの」

「へえ？」

「ポワポワはこの場所でない生きられないから…、みんなで話し合って、七日間交代で捕まる事にしたの。それでみんな安心してシユで暮らせるでシユ」

ポーポ達の話では、湖は、水の中に侵入者があって、仲間を助け出しても妨害はせず、好きにさせてくれるという。アブクが割れて中の者が目を覚ましたら、いきなり襲って来て次の者を捕まえるらしい。

「アナタ達のお友達はポク等が助けに行きまシユ。その代わり、お願いが…」

「僕達に出来る事なら何でもするよ！」

「ポワポワはこの土地から出た事がないから知識が少ないでシユ。外から来たアナタ達ならあの湖の退治の仕方が分かるんじゃないかと。ポク達、誰も犠牲にしないで安心して暮らしたいの」

それはだいちゃんが聞きたいくらいだった。

「僕達もそんなに物知りな訳じゃない」

だいちゃんは正直に言った。

「でも、調べれば何か分かるかもしれない。この土地の他の生き物達に、聞き回ってみよう」

柿ただちゃんが思い出したように飛び上がった。

「そう！ 風袋！ 風袋は？ 風すっかと一緒に沈んでしまったのかしら？ あれがあれば、ただちゃんがひとつ飛びして情報を集めて来るの！」

「これの「コト」」

小さいボワボワが風袋を持っているではないか。

「水辺に浮いていたの」

「やったあ！　じゃあ、ただちゃん、行って来るね！」

言うが早いのか、柿ただちゃんは風袋にぶら下がったままバヒ

ューンと上昇した。

「あ！　柿ただちゃん！」

だいちちゃんが止める間もなく、柿ただちゃんはぶるんぶるん振り回されながら、湖を迂回して向かいの森の方に飛んで行った。

「もう、あわてんぼなんだから。風すっかを助けてから、三人

で協力すればいいのに」

「いや、出来ればお友達を助ける事と交換に、湖を退治する

手段を見付けて欲しいでシユ」

ポーポのもっともな言葉に、だいちちゃんはへらへらした。

……と言う事は、このミッションは、柿ただちゃんと二人きり

でこなさなきゃならないのか……。

柿ただちゃんを待つ間、だいちちゃんはボワボワ達に、湖の事

を詳しく聞いた。

湖が出来たのは一年程前。一人捕まっていると、その種族は捕まらない。アブクに包まれて眠りに付いている間は、時間も止まっているらしい。でも樺太のカシラと違って、外に出ると急に時間が進む……、とかはないみたい。

助けるのは自由、助けられた者が湖面に浮かんでアブクが割れると、湖は新たな者を捕まえに来る。水の触手の射程は二十メートル位。

……考えれば考える程分からない。柿ただちゃんじゃないけれど、まるで湖が、生き物をコレクションしているみたいだ。

「まあ、お腹を満たして一息入れて下シヤい」

ポーポが黄色い実の干したのを持って来てくれた。

「ボクのおとさんの木の実にシユ」

「おとさん？　ポーポのお父さん？」

「はい、今、だいちちゃんが腰掛けているのが、ボクのおとさん」

だいちちゃんはびっくりして飛び上がった。

「ボク達は大人になると、腰を下ろして根を張るでシユ。その根のコブからボワボワは生まれるの。子供に名前を託したら、だんだん眠る時間が増えて、その内すっかり木になるでシユ。ボク達はおとさんの実を食べて、おとさんに守られて眠るの」

この灌木の林がみんな、ポーポ達のご先祖の木？　ポーポワがここでないと思えないという意味が分かった。

「今は春先だから去年の実だけれど、初夏から秋の終わりに掛けて、木は順番に実を付けてくれるの。冬の初めに実を干して、落ち葉を積み上げて、ポク達はその中で冬眠するの。冬の間、おとさん達は固いトゲを出してポク達を守ってくれるの。ポクも早く大きな強い木になって、みんなを守るでシユ」

だいちゃんは感心した。ポーポワって凄い！　何が凄いて、自分達の中だけで循環が完結しているのだ。ある意味、究極に優れた生き物なのだ。

「黄色い実は、干し柿みたいに甘かった。」

「あー!!、ずるーい!!」

湖の上空に柿ただちゃんが戻っていた。この洗柿の妖精の『誰か何か食べてるリーダー』は、とんでもなく優秀だ。

「何食べてんのー？　ただちゃんもー!」

慌てた柿ただちゃんの風袋が、湖の射程内に入ってしまった。水面から水の触手が一直線に伸びる。

「柿ただちゃん！　逃げろー!!」

柿ただちゃんはびっくりして、風袋から片手を離してしまっ

た。結果、風袋がピーキーな動きをして、触手を上手くかいくった。

「ひゃああ〜」

柿ただちゃんはぐるぐる飛びながら、湖畔に不時着した。そこも射程内だ。

「柿ただちゃん!」

伸びてきた触手より、だいちゃんが一瞬早かった。柿ただちゃんをむんずと掴んで、カ一杯陸地に向かって投げた。

柿ただちゃんはぐるぐるぐるると飛んで、灌木の幹にびたんと！と、良い音をさせて激突した。投げた反動でひっくり返っただいちゃんに、触手が襲いっかかった。

「……………!!」

思わず目を閉じただいちゃんだったが、思いも寄らない事が起こった。水の触手が、だいちゃんに見向きもせず、湖に引き返したのだ。

「…え…?」

静かになった水面を前に、だいちゃんは茫然とした。だって、湖が捕まえない者……既にその種族を収集済みって事……?　この湖の底に、泡に包まれてだいちゃんの仲間が?

ポーポが言うには、だいちゃんみたいな姿をした生き物は、この付近では見た事がないらしい。

では捕まったのは、だいちゃんみたいな通りすがりの旅人か？ いすれにしても、だいちゃんには衝撃だった。

だいちゃんは気が付いたら一人だった。自分がどここの何者かも知らない。寂しいと思った事はない…ない、つもりだ。

でも、今、目の前の湖に自分の同族が眠っている。自分の知らない一族の話を知っているだろうか？ そう考えると、だいちゃんの胸の中が、はやる気持ちでドキドキして、はち切れそうになった。

柿ただちゃんの眷族の繋がりや、風すっかの結束力を見て来たから、同族の繋がりに憧れる気持ちが育ったのかもしれない。

さっきから柿ただちゃんが、黙ってしまっただいちゃんの前で、気を引こうといういろいろやっている。

ポーポは不安な表情だ。風すっかを助けるのがだいちゃんにでも出来る作業なら、湖の退治を手伝って貰う理由がなくなってしまう。

「大丈夫だよ」

だいちゃんは、ポーポに言った。

「僕にも湖を調べたい理由が出来た。僕の仲間が捕まっているなら、助けて欲しい」

ポーポはほっとして、柿ただちゃんの手当てを続けた。

「それでね、あっちの森でも湖の事、詳しく知っているヒト、いなかったの」

柿ただちゃんは、膏葉付きの葉っぱまみれの顔で、黄色い実を口一杯に頬張っている。

「ただね、二人さらわれた種族もいるの」

「どついう事？」

「さあ、あっちのヒト達も不思議がっていた。一人で済む種族と、二人捕まる種族とがいるって」

「どついう事なんだろうね」

「んぐ…、分かんない…、あ！ それと、鳥さんが教えてくれたんだけど、すっごい昔から生きていて、何でも知っているヒバの木のお爺さんがいるんだって。そのヒトなら何か知っているかもって。ちょっと遠いんだけど…、あの山の中腹」

柿ただちゃんは森の向こうに青くけげる山脈を指差した。

「随分遠くじゃないか」

「うん、ただちゃんだと、行って帰って丸一日ってトコね。今から出て、明日の夕方には帰って来られるよ」

「今から?!、無茶だよ」

「だいちゃんは暑れかかる空を見上げて言った。」

「明日でもいいじゃないか、柿ただちゃん怪我をしているんだし。風すっかを助けてからでも」

「ん…ん…、何だか早い方がいいと思うの。大丈夫、星を見ながら飛ぶのも教わったから」

「そうだ、柿ただちゃんは新潟で飛び方の猛特訓を受けたんだ。った。」

「じゃあ、行つくねー! 風すっかを頼む…くふ…ねー!」

柿ただちゃんは黄色い実を口にぎゅむっと押し込んで、風袋に跨って地面を蹴った。たちまち二十メートル以上の高度を取って、山に向かって一直線に飛んで行った。膏薬付きの葉っぱがくるくる舞い落ちて来た。

柿ただちゃんはドシだけれど、みんなの為に一生懸命だ。さつき、自分の事だけで頭が一杯になっただいちちゃんは、ちょっとびり反省した。

ポワポワの木の葉の布団の中で、だいちゃんはなかなか寝付けなかった。

いつもは両脇にちっちゃい二人がごそごそ寝返りをうつて、よく起こされる。『寂しい』って、こういう事なんだ……。一人で旅していた頃は、寂しいなんて感じた事ないのに……。ううん、寂しさを知らなかっただけなんだ。

早く夜が明けて、風すっかを助けに行きたい、早く夜よ、明けろく、と思っている内に、鳥の声に起こされた。

昨日打ち合わせた通り、三人のポワポワと一緒に、風すっかの救出に行く為に、湖に向かった。だいちゃんは、自分の仲間を見付けたら一人で助ける心づもりでいた。

「今日はポワポワも七日目の交代の日なの」

「ポーボがだいちゃんの側に来て言った。」

「次の順番はポクなのでシュ」

「え? そうなの?」

「だいちゃん達が湖を退治してくれたらまた会えるでシュ、そう信じてまシュ」

「うん、そうだね…、じゃあ、ちょっとだけお別れだね」

だいちゃんはシマシマ合羽をしっかりと巻き付け、ポワポワ達と湖に飛び込んだ。シマシマ合羽の魔法に助けられて何とか潜水したけれど、ポワポワ達は長い腕で上手に泳いだ。

湖底に着いてびっくりした。まさかこれ程の量とは…！ 見渡す限りの泡、泡、泡……。

その一つ一つに、様々な生き物が丸くなって眠っている。泡は積み重なって、湖の底の底の…どこが底か見えない底まで続いていた。

湖の歴史は一年なんてモンじゃない！ だいちゃんは相手にしているモノの大きさに唾を呑み込んだ。

こんな中から、いつ捕まったか分からない僕の仲間を見付けるのは、限りなく無理だ。だいちゃんは一人密かにがっかりした。

風すっかのアブクは、三角錐に積み上がった頂上にあつたので、すぐに見付かった。しっかり目を閉じて、眠っているというより凍り付いている感じだが、ピンクのほっぺを見て、だいちゃんはホッとした。

すぐ横に黄緑の毛皮が丸まったポワポワのアブクもあった。

四人で二つのアブクを抱えて水面を目指した。ポワポワ達が

言ったように、水面に出ても湖は何もしなかった。

岸にたどり付いてアブクがはじけると、ポワポワ達は仲間を担いで走り出した。だいちゃんも風すっかを抱えて走った。走っている内に、眠っていた二人はまぶたをびくびくさせて、目を覚まし始めた。湖面がざわざわ波打ち出す。

安全な距離まで走り着くと、ポーポは前任者の首に掛かっていた木札を首に掛けた。

「じゃあ、行くね」

湖に向かって歩いて行くと、湖面からずっと水の手が伸びて、ポーポを抱き取った。

だいちゃんは黙って見ていたが、ふと、隣に、目を覚ました風すっかが、黙ってその様子を見ているのに気が付いた。

風すっかが湖から帰ったポワポワと一緒に、温まる飲み物を貰っている間に、だいちゃんは状況を説明した。

「じゃあ、ボク達は湖を退治する方法を見付けるんだね」

「うん」

「そうだよね…、うん…、その方がみんな安心して暮らせるよね……」

風すっかは何だか煮え切らない顔だ。

「風すっか？ どうかした？」

「え？ …うん、何でもない…、多分、ボクの気のせいだ…」

「風すっか…？」

だいちゃんが聞き返そうとした時…、突然バリバリバリと空気を揺るがす、物凄い音がした。

「何？ 何？ なんなんだ！」

ポワポワと一緒に、だいちゃん達も、灌木の林から飛び出して空を見上げた。

「人間だ!!」

人間のヘリコプターが乱暴に飛んできて、湖畔の砂を巻き上げながら着地した。

中から降りて来たのは、ピンとノリの効いた服を着た偉そうな人種で、少なくともピクニックって感じじゃない。

「何しに来たんだろっ？」

「分かんない…、でも、ボク、あの人間達は嫌いでシユ」

「初めて来たんじゃないの？」

「うん、最近、何回も来ているの。大切なポワポワの木を折ったり踏んだり…、後、土を汚しまシユ」

人間達は灌木を乱暴に押し退けて、三角の器具を立てたり、紐を張ったりし始めた。そんな人間のすぐ側で、ポワポワ達はギツと睨みつけている。

ほとんどの人間には、ポワポワのような存在は見えない。ただ、ちょっと勘の澄んだ人間なら、歓迎されていないのは感じるだろう。小さいポワポワが人間に鼻くそを擦り付けて、みんなで笑った。そんな時、人間は訳も分からず不快な気分になったりする。

「湖は人間を捕まえないんだね」

「うん、きつともう、人間が一人捕まっているんだと思うの。」

そう思っただけで、湖の底を随分探したんだけれど…」

「探したの？ 見付けてどうするの？」

「逃がすの。そしたら湖は、あの人達を捕まえようとするでしょ。そんな怖い目に遭えば、きつと、ここに寄り付かなくなるでシユ」

「湖の底に人間のアブクはないと思うよ」

急に風すっかが言って、ポワポワ達は一斉に彼を見た。

「来たばかりのアナタに何で分かるの？」

「うん…、ね、君もそう思わない？」

風すっかは一緒に救出された、さっきまで湖に捕まっていた
ポワポワに声を掛けた。

「だいちゃんは息をこっくんと呑んで、風すっかを見た。彼は
今しがたまで湖の底で眠っていて、何も知らない筈なのに？」

ところが風すっかに声を掛けられたポワポワは神妙に、うん
と頷いた。

「どうして？」

不思議がるポワポワ達を尻目に、風すっかは顔を上げた。

「人間達が帰ろうとしている」

確かに、人間達はヘリコプターの所に集まって、何やら話し
ている。

「ボク、偵察して来るよ」

だいちゃんやポワポワ達の疑問符を置き去りにして、風すっ
かはフワフワと飛んで行った。

程なく、風すっかは鼻息荒く帰って来た。

「酷いよ!! この土地を破壊して、飛行機の滑走路を作る話を
している!!」

人間達が立ち去った後…、ポワポワ達は顔を突き合わせて、

話し合いをしていた。

「何とか人間達をこの土地から追い出す方法を考えなくちゃ」

「もう一度、湖の底を探して、人間の泡を見付けよう」

「あの…」

風すっかが口を挟んだ。

「湖は多分、人間は掴まえないと思う」

「何で？ 来たばかりのアナタに何が分かる？」

感情的になりかけた若いポワポワを、さっきの、湖から帰っ
て来たばかりのポワポワが、制した。

「ボクもそう思いましょ、湖は人間を掴まえるつもりがないと
ねえ、アブクに入った事のあるヒトなら分からない？ 何とな

く、湖は、人間は、別の物だと思っている気がする…」

ポワポワ達は神妙に目を閉じた。そしてそれぞれが頷き合っ
た。

ポーポは今日、二度目の捕まる順番が回って来たみたいだし、
ここにいるポワポワ全員が、一度は湖に捕まった経験があるん
だろう。だいちゃんは独り仲間外れだった。

「ねえ、僕だけ分かんないよ、教えて、風すっか！」

「うん…」

風すっかは困った顔をした。

「うまく説明出来ないんだ。ただ、あのアブクの中に入っていると、囚われてるっていうより、何かこう…優しく守られていってる気がするんだ。そして湖が人間にはそんな気持ちを持たないってのも、何となく分かるんだ」

「…へえ…?」

風すっかかには本当にうまく伝えられなくて申し訳なさそうだ。どうやらアブクに入らない事には分からない感覚らしい。

「どうしたらいいでシユかねえ…」

湖が人間を相手にしないと分かっても、ポワポワ達の問題は解決しない。みんな手立てをなくして黙ってしまった。

風すっかか静かに言った。

「一つしかないよ、みんなでこの土地を離れるんだ」

「えっ!!」

ポワポワ達は慌てた顔を上げた。

「無理でシユ、ポワポワはこの土地でしか生きられない!」

「そう思い込んでいるだけじゃないの? 離れてみた事はあるの?」

ポワポワ達は顔を見合わせた。

「本当は何かあったら逃げて生き延びる為に、若い内は根を下

ろさずに、自由に動き回れるようになってるんじゃないの?」
ポワポワ達はだんだんに驚きの顔になっていった。自分達の気付かなかった可能性があるのか?

「おとさんの木は…? おとさん達を置いて行くでシユか?」
「うん、そっだよね…」

風すっかかには考え込んだ。こんなに沢山の灌木を運んで植え替えるなんて無理だけれど、ポワポワにはおとさんの木が必要だ。「木には根分けとか、挿し木っていう、命を分ける手段があるんだけれど…」

「あ…」

ポワポワの一人が手を叩いた。確かに、病気になった木を、挿し木で生きながらえさせた事はあるのだ。

「でも…、やっぱり、不安でシユ。ポワポワは二十年前まで、もっと沢山いたの。それがあつと言つ間にみんな滅んで、ポワ達だけになったの。ポク達まで滅んでしまったら、ポワポワって生き物はこの地上から消えてしまつのよね…」

少し年長のポワポワが、心細い顔でだいちゃんを見た。

「そっだね、でも、消えてなくなりはしないよ。ほら、ポーボが湖に眠っているじゃない。ポワポワは一人いれば、根から子

孫を増やせるんだから………?」

だいちゃんは息が止まった。今、凄く、核心的事を喋った気がする……。

「そうだ！ ポーポ！ ポーポを置いて行けない！」

年長のポワポワが叫んで、だいちゃんの思考は中断された。

ポワポワ達はポーポを助ける算段を始めた。この地を離れるのなら、湖に生贄を沈めて置く必要はない。ポーポだって、七日後に仲間が助けに来てくれると信じて、眠っているんだ。

その時、地面が小刻みに揺れた。

「……?!」

続いて唸るような地響き…、だんだん大きくなる！ 小高い所にいた子供のポワポワが、悲鳴を上げた。

「湖が…！ 湖があっ!!」

みんなそっちに駆け上がった。だいちゃんも湖を見下ろして、息を呑んだ。

湖の中心に大きな渦が巻き起こっている。まるで底に栓があって、それを抜いたみたいだ。いや、本当に水が抜けるように水位が下がり、岸辺がみるみる後退して行く。

「ポーポを助けるでシューー！」

ポワポワの何人かが駆け出した。だいちゃんも走った。

突然、渦巻きが天に伸びて、巨大な竜巻きになった。竜巻きから無数の水の触手が伸びて、だいちゃん達を薙ぎ払った。まるで、邪魔をするな!! と言っているようだ。

一体何が起こっているんだ？ 今まで、仲間を助けるのは阻止されなかった筈なのに？

吹っ飛ばされながら、だいちゃんは竜巻に巻き上げられるアブクの中に黄緑の色を見た。

「ポーポがいる！ あそこだ！」

しかし、だいちゃんもポワポワ達も、触手に阻まれて近寄る事も出来ない。

「任せて!!」

後ろで風すっかが叫んだ。

「あの子を助けるんだね！」

風すっかは自分のシマシマ合羽を脱いで、ブンと一振りした。途端にシマシマ合羽は板のようにピンと平らになった。

『『群衆の魔法』…兄ちゃんが編み出したんだ、大人に内緒で』
風すっかはヒョイと合羽に飛び乗った。

「めちやめちやスピードが出るんだ、その代わり曲がれない」

「風すっか、湖は君を捕まえようとすする！ 気を付けて！」

「新潟の風すっかの技をしろじろ！ 行っけえええー!!」

「はひゅゅーん!! と良い音を響かせて、サーフィンすっか

は、黄緑のアブクに向かって一直線に飛んだ。

確かに凄いスピードだ。水の触手が全然追いつかない。その

まま竜巻に突っ込んで、見事ポーポを掴まえた。凄いぞ！ 風

すっか！

「あ……？ あれ？」

水に濡れた途端、シマシマ合羽は魔法がとけてへなへなにな

った。

「うわあぁー!!」

風すっかはポーポを掴まえたまま空中でシタバタした。落ち

る風すっかに、無数の触手が襲い掛かる。

「風すっかー!!」

「だいちゃんは荒れ狂う湖にびびびび駆け出した。」

空の一点がきらりと光り、赤い物体が矢のように飛んで来て、

風すっかとポーポをびびらした。

「だいちゃんはびびくろくして、そして、大きく息を吐いた。」

「か…、柿ただちゃん…」

「てへへ、美味しいトコどろろ！」

柿ただちゃんは風すっかに操縦を渡して後ろに移った。風袋

は水を得た魚のように急上昇する。

湖の上空で、柿ただちゃんは、高い声で不思議な呪文を唱え

ながら、懐から取り出したヒバの葉を撒いた。

すると、竜巻がすっと湖の中に落っこちて、治まった。触手

も水の中に帰って行った。ただ、栓を抜いたみたいなの渦巻きは

そのまま、水位はどんどん下がって行く。

だいちゃんの頭上を、風袋が風切り音を響かせながら飛び越

して行った。ポーポの死にそうな悲鳴が後からドブラー効果

で付いて来た。

そりゃそうだ、いきなり眼覚めたと思ったら、空の上で落っ

こちたり、急上昇したりだもんな…。

「だいちゃんもホツとして陸地に帰ろうとした。」

「c-c-」

「抜けない…？ 水が泥沼のようにだいちゃんの足を捕まえて

いる。そしてどんどん水の中へ引き摺られて行った。」

「誰か…!!」

ポワポワ達はポーポの方に行ってしまって、誰もだいちやんの異変に気付かない。

だいちちゃんは湖にザンブと沈んでしまった。途端に急激な睡魔に襲われた。

* * *

ふうっと意識が戻った。暖かくて気持ち良い。水の中の善なごに？

そっと目を開けてみた。そこは水の中ではなかった。銀色の低い草の生えた、草原に立っていた。

辺りはモヤに包まれて、遠くは見えない。何で？ これはアブクの見せる夢……？

「まあ、そんなトコロじゃ」

だいちちゃんは声の方を振り返った。？!! ……だいちちゃんがい

違っ…、だいちちゃんと同じ姿だけれど、もっと年取った、おじいさんだ。よく見ると、その後ろにもびっと十人ばかりの同じ姿のヒト達が立っている。

「驚いたでしよう、すまなかったね」

「湖はお前を掴まえるつもりはなかったんだけれどね、私達が

頼んで、連れて来て貰ったんだよ」

「良く顔を見せておくれ…、まあ…、この時代に我が一族が生き残っているなんて…」

「……？」

だいちちゃんは驚き過ぎて言葉が出なかった。

「じりじり、口々に喋ると混乱させてしまっじやろ、僕が話すじりじり」

最初のおじいさんが、一歩前に出た。

「さて、お前はこの湖の役割に薄々気付いているね」

だいちちゃんは普段、『お前』って呼ばれるのは嫌いだっだけれど、何故だかこのおじいさんに呼ばれるのは心地良かった。何となく、親が子を呼ぶような『お前』だったからだ。

「えと…、でも、当たっているかどうか？」

「言っているらな」

だいちちゃんは唾をぐくんと呑み込んで、怖々喋った。

「絶滅の危機にある生き物を保護しているの？ 単体で増えるポワポワみたいな生き物は一人、雌雄で増える生き物は二人…」

「その通りじゃ」

おじいさんはあっさりとは答えた。

「正確には『人間に追い立てられて絶滅の危機に瀕する種族』を保存する役割を持っておるのじゃ。アブクの中で時間を止めて保存し、人間に脅かされない時代になったら、徐々に地上に戻す」

「やつはの……」

予想していたとはいえ、あまりの途方のなさに、だいちゃん
は頭がくらくらした。

「湖が意志を持ってやっているの？ それとも誰かが湖を操っているの？」

「どちらもちと違つ……、敢えて言うなら、自然発生なのだよ」

「自然発生？ こんな怪物みたいな湖が？」

「つむ……、動物は増えすぎると生まれてくる子が小さくなった
り、逆境になると対抗出来る強い子が生まれたりするだろう？
誰が操作するでもなく。湖もそつという自然の摂理の一環なのじ
や」

「自然の摂理……」

「こんな怪物みたいな湖が発生せねばならない程、人間が怪物
なんじゃろうな」

「……」

だいちゃんは、たまに人間の文明の恩恵にあずかる事もある

ので、おじいさんの言葉を深く胸に受け止めた。

「僕をここに呼んだのは、それを教えてくれる為？」

「そつじゃ、それとあと、お前を誘つ為じゃ」

「え……」

「僕等(わしら)と共に来んか？」

「ええっ！」

長らくアブクに入っていると、だんだんに湖の意志が理解出
来るようになって来る。風すっかやポワポワが、湖が人間を捕
まえない気がしたのは、その為だ。

おじいさん達は、湖の意味に気付いて、一族を挙げて保護し
て貰ったのだ。

湖が仲間が助けに来るのを妨害しないのは、湖の役割を外の
仲間伝える為だ。残り少ない一族みんなまとめて保護して貰
いに来た種族は、他にも沢山いるという。

「僕等は、本当は、アブクの中で眠っているのじゃ。しかし、
こつやつて夢の中で仲間と過(こ)せるし、外で起こつてる事も、
知りたいと思えば、夢で見る事が出来る。眠っていても、寂し
くない、普段と変わらずに過(こ)せるのじゃよ」

おじいさんは周囲の仲間と頷き合った。みんな優しい目でだ

いちゃんを見ている。

「どうじゃ、独りで地上で生きるより、儂等と共に来んか？」

「ありがとうございます」

「だいちゃんは丁寧にお辞儀をした。」

「でも、僕、独りじゃないんです、待っていてくれる友達がいるの。だから、帰ります、ごめんなさい……」

おじいさんと仲間達は、変わらぬ優しい目でだいちゃんを見つめた。

「相分かった、お前は幸せ者じゃのう……」

……………

「だいちゃん、だーいちゃーん!!」

柿ただちゃんが、ちっちゃい手でだいちゃんのでかい顔を、ピタンピタン叩いている。涙と鼻水でぐちゃぐちゃだ。

風すっかも、息を止めて不安一杯の顔だ。だいちゃんが目を開いて手を伸ばしたら、二人共こぼれるような笑顔になった。

それだけで、もう、充分！ 戻って来て良かった……！

あんなに大きかった湖は、今やザリガニ池くらいだ。

人間が侵略を開始すると、湖は沢山のアブクと共に消え、ま

たいつか、どこか、これから人間が脅かす土地に現れる……。

ヒバの木のじーじは、そう教えてくれたらしい。

「湖さん、悪い奴じゃなかったのね、ちょっと乱暴だけれど」

語り終えた柿ただちゃんの横で、ポーポはふらりと立ち上がった。

「じゃあ、ボクは行かなくちゃ……、湖が消えない内に……。ポーポの種を絶やさない為に……」

だいちゃんも風すっかも手を上げかけたまま、止まってしまった。ポーポを何て言うって引き止めたらいいんだろう？

二人の間から柿ただちゃんがぼおんと飛んで、ポーポの後ろ頭にびたんと張り付いた。

「種を絶やさない？ 何それ？ せっかくだだちゃんがカツコよく助けたのに！ ポーポは後輩に黄色い実の美味しい干し方を教えなきゃダメでしょ。アブクの中にいるより、一杯やるコトあるでしょ！ 行っちゃダメ！」

ポーポは毒気を抜かれた顔でキョトンとした。他のポーポワ達も、それで良いという顔で頷いている。

だいちゃんはそっと懐の指し差し笹舟に触れた。

あの時……、おじいさんに誘われた時……、懐でそっと回してみ

た笹舟は、当然のようにおじいさん達を指した。でも、だいちやんはここに帰って来る事を選んだ。

何が正しいかなんて、誰にも分らない。

正しい事が良いコトとは限らない。

一夜明けて、湖は少しの水滴を残して消えていた。沢山のアブク、沢山の思いと共に……。

だいちやん達は、ポワポワ達の、引っ越しの準備を手伝った。ポワポワの木は、挿し木に応じてくれた。

額を押し付けて強くお願いすると、てっぺんの枝に命がぎゅっと集まった。そこだけでも、持ち運べばいい。

「こんな事出来たんだ」

「ポク達も知らなかったでシュ。ポワポワには、まだまだ見付けていない可能性があるのでシュね。アナタ達のお蔭でシュ」

「そんな…、僕達、結局、何にも出来なかった」

「ただちゃんは大活躍したもん！」

柿ただちゃんがポーポと作業していた手を離して胸を張った。引っ越しの荷物がばらばらと崩れて、ポーポは苦笑いした。

「湖が消える時、一悶着あるかもしれないからって、ヒバの木

のじーじに貰った『神鎮めの呪文』の葉っぱを大急ぎで持って帰って来たんだから！」

「はいはい、柿ただちゃんは偉い偉い」

「ぶー、全然偉いと思ってるない〜」

風すっかが上空からふわりと降りて来た。

「あの森の西側に誰も住んでいない土地がある。切り立った地形だから、まず人間は入って来ないと思う」

「何から何までありがとう」

皆が頑張って、引っ越しの準備は思ったより早く進んだ。

明日が引っ越しという夜、だいちやんは最初に湖を見下ろした丘に登ってみた。

ここで風すっかが浚(く)ざられるの見たのは、ほんの四、五日前なのに、随分昔な気がする。活躍したのは柿ただちゃんと風すっかで、自分はずっとただただで、何も出来なかったなあ。

せっかく同族に会えたのに、自分の種族の名前を聞く事すら忘れていた。僕って本当に、ドジで、情けないなあ……。だいちやんは何だかしょんぼりしてきた。

「どうしたの？ 神妙な顔しちゃって」

風すっかが真上からすうっと降りて来た。

「わー！ びっくりしたー！」

「ごめんごめん、風袋のレストアしていたの。随分無理させちゃったし、明日も頑張って貰うからね」

「偉いなあ、風すっかは。やる事ビシッとこなして」

「そっつ〜？」

「………、ね、もしも、風すっか一族が絶滅の危機に瀕したら、風すっかは湖に保護して貰うっつ〜」

「それは、有り得ないよ、風すっかは強いもの」

「もしもだよ、もしも」

「闘う！ やるだけの事やって、それで駄目なら、そっついう運命の種族だったって事さ」

「うへえ！ 強いんだね。じゃあ、湖の存在には否定的なの？」

「いや、湖は凄いと思うよ。今回の出現も、おそろしく正解だったと思うっつ〜」

「………？」

「ボクさ、嘘付いたんだ」

「えっつ〜？」

「人間が滑走路を作るって言ったじゃない、あれ、嘘なんだ」
「えっつ〜？ えええっつ〜？ だって、ポワポワ達はその為に引越

しを…」

「そっつ、作るのはね、もっと酷い物…、毒の風を出す発電所…」

「………!!」

「新潟にも同じ物があるんだ、すぐには何も起きない。でも、じわじわ、じわじわ、色んなモノを蝕むんだ」

「何で？ 滑走路なんて？」

「あの発電所はね、だいちゃん…、ちょっと逃げたくらいじゃ逃れられない。そして、ポワポワ達は知っているんだ、毒の発電所の事を。過去に…二十年前に、同じ理由で多くの仲間を失っているから。最初はポワポワ達を絶望させない為に嘘を言ったんだ、………けど…」

風すっかは、湖のあった窪地を見つめた。

「それを言ったら、ポワポワ達は湖に誰かを沈める事を考えるだろう」

「だいちゃんはハッとした。風すっかは座った形のまま、鼻を膝の間に埋めた。

「一族は、みんなを幸せにする為にあるんだ、誰かが犠牲になるためじゃない。でも、だいちゃん…、ボクの勝手な思い込みが、ポワポワという生き物を、この世から消してしまっかもしれない…」

だいちゃんは風すっかをじっと見た。いつも自身満々だけれど、その分責任感も人一倍なんだ。

「風すっか、ポワポワ達は幸せだと思つよ。誰かを犠牲にして種を保存するよりも、今を一生懸命生きる方がいい。絶対…!」

風すっかは、だいちゃんを見上げて、「ニコッと笑った。

「ああ〜!! 何してんのお〜?!」

柿ただちゃんが、ポーポと連れ立って丘を登って来た。

「柿ただちゃんこそ、こっそりテートかい?」

いつもの風すっかに戻っていた。

「ちがーう! 今晚流れ星が一杯流れるっていうから、ポーポと一緒にお願いしに来たのよ!」

どうやら名のある流星群の日だったらしい。星がひとつ、ふたつ…、そしてどつと流れた。

四人は頭を突き合わせて、放射状に寝転がって、流れる星を眺めた。

ポーポは胸で手を組んで一心不乱に願っている。彼は真剣に願う事が沢山あるのだろつ。

風すっかは、ポーポの願いが叶いますように…、と願った。

だいちゃんは、風すっかと同じ事と、おじいさん達の未来の幸せを祈った。

柿ただちゃんは…? 横を見ると、よたれを垂らして幸せそうに寝息を立てている…あーあ…。

ポワポワ達の引越しが始まった。

彼らは、短い脚で頑張って歩き、何日かけて、谷あいの窪地に着いた。最適地を見付けるのに、指し差し笹舟の力を少し借りた。途中の山越えて、向こうの平原に人間の機械が沢山見えた。

「もう、あんな所まで来ていたんだ」

「湖が逃げる訳だね」

「人間は湖が消えていてびっくりしないかな?」

「さあね、見えていなかったかもしれないし…、見えていたとしても、消えた理由なんて、永遠に分かんないよ」

風すっかが何往復もして、おとさんの木の枝を運び、だいちゃんも柿ただちゃんも手伝って、新しいポワポワの林は完成した。

その夜はささやかな宴が開かれた。

ポワポワ達は不思議な美しい踊りを見せてくれた。

風すっかは、また、兄ちゃんが発明した魔法!と称して、柿ただちゃんを垂直に百メートルも打ち上げて、やんやの喝采を浴びた。

だいちゃんは、おすおす草笛を吹いた。下手くそだったけれど、みんな目を閉じて、じっと聞き入ってくれた。

翌朝、だいちゃん達はポワポワ達に見送られて旅立った。

黄色い実を沢山持たせてくれようとしたのを丁寧に断って、

三つだけ貰った。

柿ただちゃんは、ポーポを抱きしめて、めそめそした。そして自分のシマシマ合羽を裂いて、ポーポの襟巻にした。

三人が見えなくなるまで、ポワポワ達は手を振ってくれた。

「次、来る時は、黄色い実の林が広がっているといいね」

「うん、その時は、ポーポも立派な木になっているわ。ただちゃんが来たら、とびぎり美味しい実を成らせてくれる……って約束したの」

「……そうか、もう、次に会っても、ポーポは木になっているのか……」

「うん、けどただちゃんは、ポーポの木はきつと一目で分かるわ。額を付けて、心でお話するの」

風すっかが低空飛行で飛んで来た。

「山に続く道を見付けたよ。まずはヒバの木のじーじにお礼を言いに行くんだよね」

「じゃ、行こう」

三人は前を見て、しっかりした足取りで歩いて行った。

くおしまい